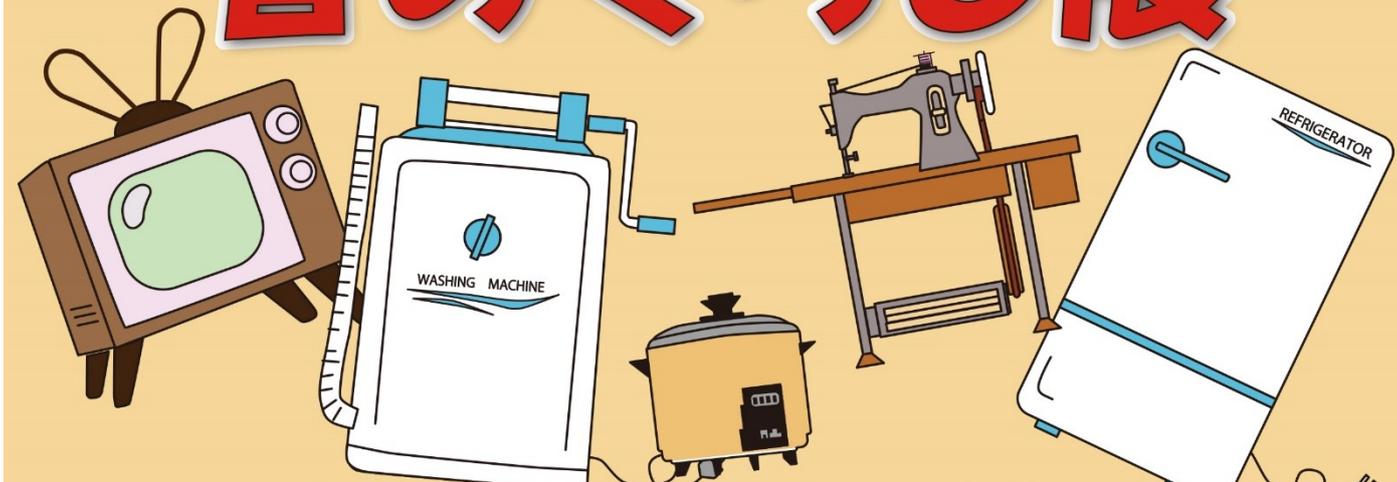


昔のくらし展



私たちの身の回りには、様々な道具にあふれています。スマートフォン、テレビ、掃除機、炊飯器、冷蔵庫など、これらの道具は、今の私たちの生活に欠かせないものばかりです。

一方、昔の道具を現在の私たちが見てみると、使い方がわからないものや、使ってみると不便なものもあるかもしれません。それでも当時の人たちは、より良い生活のために知恵と工夫を活かして道具をつくりました。道具も時代と共に姿や形を変え、使いやすく、より便利な道具へと変化してきました。

ここでは、昭和 40 年(1965)頃の高度経済成長期に使われていた道具を中心に紹介していきます。昔の人の知恵と工夫を見ていきましょう。

着る

江戸時代までは着物(和服)でしたが、明治時代に洋服を着る人も現れます。閑宿周辺の人々の服が洋服になるのは、昭和 20~30 年頃からです。はきものも下駄やぞうりから靴に変わっていきます。また洗濯もたらいと洗濯板による手洗いから電気洗濯機に変わります。裁縫の針仕事も手縫いから足踏みミシンへと変わっていきます。



下駄

1本の木から作られていて、歯がすりへったら庭用にするなど、使えなくなるまで大切に使いました。



足踏みミシン

洋服を着るようになった明治時代以降、使われるようになりました。明治時代に国産ミシンが製作され、大正時代には足踏み式が登場しました。昭和 50 年代ごろから、電気ミシンが主流となっていました。



裁縫箱

昭和 40 年代に流行した西洋風の裁縫箱です。この頃普及したプラスチック製素材を用いています。



張り板

昔は着物が汚れると、全部ほどいてから洗い、うすく溶かした糊に浸し、張り板に張って乾かしてから縫い直していました。張り板は、嫁入り道具の一つともされていました。

洗濯板

明治時代にアメリカから入ってきた洗濯をする道具です。ギザギザの面に布をこすりつけて洗います。昭和 30 年代に洗濯機が登場するまで使われまし



食べる

明治時代から、食事には和食の他に洋食が加わりました。また、台所が土間から板の間になり、料理をするための燃料が、薪からガスに変わり、今ではオール電化になっている家庭もあります。調理道具も竹や木の製品から金属やプラスチックの製品に変わり、核家族が増えたため、小さい調理道具が多くなりました。



木製冷蔵庫

上の段に氷を入れ、下の段に冷やす食材を入れました。木製冷蔵庫が庶民に普及したのは、昭和30年代でした。昭和50年代には、家庭での電気冷蔵庫の普及率が99%になりました。



手桶

井戸から水を汲む時に使用していました。昭和30年代に水道が普及すると、井戸が使われなくなったため、手桶も使われなくなりました。



羽釜

昭和30年代までは、土間にかまどがあり、ご飯を炊くには羽釜を使用していました。



電気炊飯器

昭和30年代以降、ご飯を炊く道具は、ガス炊飯器になり、その後電気炊飯器になりました。



マッチ

明治時代半ばから、一般家庭にマッチが普及しました。ガスレンジの普及により、使用される機会が少なくなりました。

住む

サラリーマンの家庭では、家族だんらんの場、食事の場、寝る場所を兼ねる部屋が増え、家自体も小さくなりました。昭和40年代から、都会に近いところに団地ができ、その後、住まいは食堂、居間、寝室、子ども部屋など、個室に分かれた造りになっていきました。



鉄瓶

昭和30年代まで、居間と食堂を兼ねた囲炉裏の部屋があり、囲炉裏には鉄瓶や鉄鍋をかけて使用しました。

火鉢

灰の中に熾した炭を入れて暖を取ります。石油を燃料としたストーブの登場により、姿を消しました。



あんか

炭や石炭その他の粉を固めた燃料である豆炭を熱して中に入れると、一晩中温まることができます。やけどをしないように、布袋などに入れて使用しました。



カラーテレビ

昭和30年代に白黒テレビ、昭和50年代にカラーテレビが普及し始めました。

柱時計

ゼンマイ式の振り子時計で、1日に1回ネジを巻いて使いました。



遊ぶ

メンコやベーゴマなどのほか鬼ごっこやかくれんぼなど、近所の子どもたちが空地に集まって遊びました。昭和 40 年代から乾電池式のおもちゃやゲームなどが増え、遊ぶ場所や遊び方も変わっていきました。



メンコ

江戸時代は粘土を低温で焼いた泥メンコでしたが、明治時代中頃に、紙のメンコが出てきました。



ビー玉

諸説ありますが、ビードロ(ガラスを示すポルトガル語)玉が語源といわれています。



おはじき

最初は貝殻や小石、木の実でしたが、明治時代後期からガラス製になりました。



ベーゴマ

ばい貝に粘土をつめて遊んだものが最初といわれています。鋳物製のものができたのは明治時代以降で、大正時代から人気が出ました。



お手玉

小さな布袋に小豆などが入っています。歌を歌いながら数個のお手玉を投げ上げて、受けたり拾ったりする遊びで、地域ごとに歌の違いがあります。

働く

関宿城博物館の周辺は川が近く、かつては水害も多かった場所なので、水害に備えるため収穫時期が異なる米と小麦の二毛作が行われていました。また沼も多かったので、農業の傍ら漁業を営む家もありました。昭和 40 年代からは会社勤めの家も多くなり、働き方や生活スタイルが大きく変わっていきました。



唐箕(とうみ)

収穫したお米は、粳摺りをして粳殻を取り外します。これを唐箕の上から入れ、取っ手を廻して風を起こすと、軽い粳殻と重い実、中間のくず米に分けることができます。



筥(うけ)

川や沼などで魚を捕る道具です。中に餌を仕掛けておくと、魚が入って出られなくなる仕組みです。



ボッチ笠

頂点にボッチがある笠をいいます。素材はい草で、雨や日差しの強いときにかぶりました。



背負い籠

背中に背負って、たくさんものを運べる便利な道具です。道具や収穫物入れとして多用されます。



風呂鍬

田畑を耕すときに使います。鉄が貴重だった頃は、木の台(これを「風呂」といいます)に鉄の刃をつけた形でした。